

ガリシア・ポルトガル語叙情詩のテキストにおける バリエーションについて

Análise comparativa das variantes gráficas verificadas em três códices de lírica galego-portuguesa

黒 沢 直 俊
Naotoshi KUROSAWA

1. はじめに

ガリシア・ポルトガル語叙情詩 *lírica galego-portuguesa* とは、12世紀後半から14世紀半ば頃までイベリア半島の宮廷を中心に行われていた詩歌のことで、音楽をともなって朗唱されたり、歌われたりしたもので、個々の詩篇はカンティーガ *cantiga* と呼ばれ、1行10音節前後の詩句が6、7行集まって1連をなし、3、4連で1篇という構成の、比較的短い作品群からなっている。当時の文献では *cantiga* の他に *cantar* という呼び名も行なわれるが、特に、この *cantiga* という語はガリシア・ポルトガル語特有の名称である。他のロマンス語では同じような文学ジャンルを指して *cansó*, *chanson*, *canzone*, *canCIÓN* などを用いる。このような中世カンティーガには、レオン・カスティージャ王のアルフォンソ十世賢王（1221- 在位 1252-1284）による聖母マリア賛歌集 *Cantigas de Santa Maria* のごとき宗教的内容のものと、恋愛や社会風刺などをテーマとする、いわゆる俗詩 *poesia profana* に分類される作品群とがある。両者は写本の伝承系統を異にし、特に、後者の俗詩に分類される作品については、主に、3つの写本が相互に重なり合うような形ですべての作品を伝承している。詩篇 *cantiga* の総数は1680篇ほどで、匿名の作品も多いが、作者としては153人ほどのトルバドール *trobador* の名が知られている。これらはガリシア・ポルトガル語と呼ばれる、古い段階のポルトガル語で書かれ、文学史的には南仏のトロバドールの叙情文学の影響の元に成立したもので、初期ポルトガル語文学のもっとも重要な核を形成する。

本稿はこの叙情詩の詩篇のうち3つの写本に共通して現われる54篇のなかから、その約半分当たる25篇を選び、写本の間に見られる異同を比較し、それについて、文献的、あるいは言語的考察を試みるものである。実際の作業には、問題となる3つの写本のファクシミリ・エディションと、今世紀初頭に公刊された「校定本」である *Michaelis 1904* を用いた。*Michaelis 1904* は3つの写本のうち、アジュダ写本に現われる作品について校定を試みたものであるが、他の2つの写本との直接の比較を行っていないため校合がやや不十分である。

2. カンティーガを伝承する資料

3つの写本とは以下のものである。なお、ここでは、たとえば“Cancioneiro da Ajuda”であれば「アジュダ写本」としているが、cancioneiro は、本来、cantiga を集成したものを指し、「歌集」または「歌謡集」と訳されるべきものである。従って、日本語では、「アジュダ歌謡集写本」の「歌謡集」を、また、ポルトガル語では“Código do Cancioneiro da Ajuda”の“Código”が便宜的に省略されたものと理解されたい。

(1) アジュダ写本 Cancioneiro da Ajuda (以下“ A ”と称する)

現在、リスボンのアジュダ図書館が所蔵するもので、写本の文字などの特徴から13世紀末から14世紀初めにかけてイベリア半島で作成されたものと考えられている。アジュダ写本は19世紀初めに発見され、一時は、その発見場所から貴族学校写本 Cancioneiro do Collegio dos Nobres と呼ばれていたが、1832年にアジュダ宮殿内にあった王立図書館に移管され現在に至っている。しかし、発見される前の、中世から近代にかけての伝承の経緯が不明であるため、研究者によっては、Tavani 1990 のように、アルフォンソ十世賢王の宮廷で作られたと考える向きもあるが、写本がどこで作成されたか研究者の間のコンセンサスが得られているという状態ではない。ポルトガルのデニス王 D. Denis (1261- 在位 1279 -1325) の宮廷であったとする説もあるが、今のところ決め手はないように思われる。この写本の特徴は各詩篇の1連目が行間に空白をあけて書かれていることで、これは後に楽譜を挿入するスペースであつたらしい。飾り文字の装飾が完全には終わっていないことから写本が未完であることがうかがわれる。羊皮紙が用いられ、文字はポルトガルでは13世紀から14世紀初めにかけての文書に典型的なゴシック体で書かれている。この写本が伝承する作品は310点であり、作品のすべては、内容的に cantiga de amor と呼ばれる、男性から女性への、特に既婚の身分の高い女性へのかなえられない愛の悲運を歌ったものが大部分である。

(2) リスボン国立図書館写本 Cancioneiro da Biblioteca Nacional (以下“ B ”と称する)

この写本は1525年から26年にかけての時期に当時のイタリアでユマニスタのアンジェロ・コロッチ Angelo Colocci (1474-1549) が作成させたものであることが現在ではわかっている。1888年頃からイタリアの文献学者のモナチ Ernesto Monaci (1844-1918) が私有していたが、1924年にポルトガル政府によって買い取られ、69年以降リスボンの国立図書館に所蔵されている。このような事情からコロッチ・ブランクッティ写本 Cancioneiro de Colocci-Brancuti と呼ばれることもある。写本には紙が用いられ、文字は写字生により異なるが、円体ユマニスタ文字と後期ゴシック体が用いられている。この写本は伝承する作品の数が約1700と最大であることのほかに、冒頭に Arte de Trovar「作詩術」と通称されている短い記述があり、叙情詩に対する当時の分析として貴重である。現在、この時代の叙情詩を内容から (1) cantigas de amor, (2) cantigas de amigo (3) cantigas de escarnho e maldizer の3つに分けるやり方は、この Arte de Trovar の記述に基づいたものである。ちなみに、このうち2番

目の *cantigas de amigo* は、詩人が女性に模して、女性の側から男性への愛の思いを歌うという、先行するプロバンスの文学伝統には存在しない、イベリア半島独特のジャンルであり、現代でも十分鑑賞に耐え得るほど、作品の質的レベルが高いので、この分野の叙情詩の中ではもっとも注目されている。ただし、「女性の側からの男性への愛の歌」と云っても、この時代のトルバドゥールは、知られている限りすべて男性であったことは忘れてはならない。また、この写本に盛られた作品の数が約1700と、この分野の詩篇の総数(約1680)より多いのは、分野を異にするオック語やカスティーリャ語で書かれている詩が含まれていることや同じ詩句が複数箇所で見られていることなどがその原因である。

(3) ヴァチカン図書館写本 *Cancioneiro da Biblioteca Vaticana* (以下 "V" と称する)

Bと同時期にイタリアでやはりコロッチが作成させたもので、写本は紙で、文字はひとりの写字生による斜体ユマニスタ文字である。もっとも、ユマニスタ文字にしては省略が多く特異で、ポルトガル語をあまり解さない写字生が筆写したのではと推定されている。作品の数は約1200点である。BとVで詩篇の間に書き込まれた、トルバドゥールの名や筆写に用いられた元の写本に関するものと思われる短いコメントなどはコロッチの直筆であることがわかっている。

現在知られている中世ガリシア・ポルトガル語叙情詩の作品のすべてはこれらの3つの写本のなかに見出されるが、各写本のなかでの詩篇の位置は普通、通し番号で示される。アジュダ写本では、この写本のエディションである Michaelis 1904 で用いられた出現順の番号1~310が、またヴァチカン図書館写本では、これも19世紀に出版されたモナチのエディションで出現順に振られた1~1205の番号が詩篇を特定するのに用いられる。ただし、これらの番号は出現順といっても、なかには冒頭の1行のみで後を欠くものがあったり、連が落ちるなど、その現われ方は必ずしも一様ではないので、厳密に作品の総数や拡がりやを反映するものではない。一方、リスボン国立図書館写本の場合は、事情が異なり、写本にコロッチが書き込んだ番号がある。1~1664がそれである。しかし、これにしても、同じ番号が繰り返されたり、欠落している番号もあるので、作品の総数とは一致しない。特定の研究者による独自の指定方法もあるが、あまり普及していないので、やはり、これらの番号は、今のところ、詩篇を特定する唯一の一般的な方法である。本稿では、この番号に各写本を示す略号の A, B, V を並記し A 1~310, B 1~1664, V 1~1205 のように示す。

これら3つのほかに、バンクロフト図書館写本(カルフォルニア大学バークレイ校) *Cancioneiro da Bancroft Library* と呼ばれるものがあるが、これはVを元に1592年から1612年にかけての時期に筆写された *codex descriptus* であることがわかっているので、ステマティカに基づいて除外することができる。ほかに断片的なものとして、ヴィンデル羊皮紙 *Pergaminho Vindel* (ニューヨークの Pierpont Morgan Library 所蔵、13世紀末から14世紀初めのもの)や、シャーラー羊皮紙 *Pergaminho Sharer* (リスボンの Torre do Tombo 古文書館所蔵、1990年に発見されたもので、やはり13世

紀末から14世紀初めのものという), Mと通称される, マドリッド国立図書館のMS 9249の25枚目表と呼ばれる1ページ, さらにPと呼ばれるポルト市立図書館のMS 419に属する紙製の3ページの存在などが知られているが, これらによって伝承されるテキストはごくわずかである。ただし, ヴィンデル羊皮紙の場合は, 13世紀半ばから後半にかけて活動したとされる Martin Codax の作品7点を含み, うち6点に楽譜が添付され, そのなかの2曲については詩篇との同時代性を疑う研究もあるにしても, この写本はカンティーガに付けられた曲に関する唯一の証言であり, きわめて貴重である。

3. 対象と方法

Tavani 1988, pp.67-72 や D'Heur 1973, pp.43-100 は写本の間での詩篇の対応を示しているが, それによれば3つの写本に共通して現われる詩篇は54あることになる。今回, 調査の対象とした詩篇は次の25篇である。括弧のなかに3つの写本のなかでの位置を示した。通し番号の1から25はここでのみ用いられる便宜的なものであるが, 写本の間での異同を示すにあたって詩篇を指定するために用いられる。

1 (A184 B677 V279)	10 (A229 B419 V30)	19 (A244 B432 V44)
2 (A213 B443 V55)	11 (A230 B420 V31/32)	20 (A245 B433 V45)
3 (A222 B392 V2)	12 (A231 B421 V33)	21 (A246 B811 V395)
4 (A223 B393 V3)	13 (A232 B422 V34)	22 (A248 B816 V400)
5 (A224 B395 V5)	14 (A233 B423 V35)	23 (A255 B842 V428)
6 (A225 B396 V6)	15 (A234 B424 V36)	24 (A257 B434 V46)
7 (A226 B401 V11)	16 (A240 B428 V40)	25 (A258 B435 V47)
8 (A227 B402 V12)	17 (A242 B430 V42)	
9 (A228 B426 V38)	18 (A243 B431 V43)	

具体的な作業としては, 写本から転写したテキストを1行1単語のものに改め, 3つの写本に現われる形を1行にまとめる。そうすればテキストに現われる特定の語形について各写本での形をひと目で比較できるようになる。実際には, 同一詩篇について写本の間で必ずしも語句の数が合わなかったり, 入れ替わりがあったりする所以对応しない部分も出てくるが, そういう場合は無理に対応させず, 欄を空白として残したまま作業を進める。しかし, 結果的には, ここで扱われた資料の範囲内では写本の間での異同は綴り字的なものや類似した語に留まるものが多く各写本の語形はよく対応する。また, 異同を比較することが目的なので, 場合によっては語順などを見るために複数の語に対応させることもある。連が入れ替わっている詩篇もあり, この場合は問題となる形を//ではさんだ。行頭に上の1か25までの通し番号と各詩篇内部での行番号を合わせて, たとえば3-14のようにして

語形の位置を特定した。これは通し番号3, すなわち A222 B392 V2 のテキストの14行目ということである。この行番号は Michaelis 1904 のエディションで用いられているものを使用した。行が入れ替わっていたりするときにはアジュダ写本での位置が基準になる。以下に対応表の一部を示す。

A	B	V	A	B	V
1-01 [M]uitos	: Muyt(os)	; Muyt(os)	25-05 mais	: mays	; mays
1-01 ueg'eu	: uei'eu	; uei'eu	25-16 eu	: / eu/	; eu
1-01 que	: que	; que	25-16 pauor	: / pauor/	; pauor
1-01 sse	: se	; se	25-17 [D]e	: / de/	; de
1-01 fazen	: fazen	; fazen	25-17 u(us)	: / u(us)/	; us
25-05 casaren	: casarem ; casarem		25-17 casaren	: / casarē / ; casarē	

転写に際し、省略表記の展開は () で、写本の上での脱落部分の補足は [] で示した。たとえば、上の [M] や [D] は本来飾り文字となるべきところその作業が行なわれなかった部分であり、(os) や (us) は語尾の -us, -os に対し用いられた中世の省略表記にあたる。また、写本の上では語の分かち書きは完全ではないので、必要に応じて、' で境界を示した。上の ueg'eu や uei'eu は現代語で表記すれば vejeu にあたる。// によって通し番号25の詩篇ではリスボン国立図書館写本で連の入れ替わりがあることが分かる。

このリストについて、通し番号一行番号の部分を除いた桁目からソーティングをかけると語形別の対応表が作成される。

4. 写本の間での語形の異同

本稿では写本のステマティカについては深く立ち入らないが、現在まで、主に詩篇の分布というような資料の外的特徴や断片的な異同等に基づいて提出されている説に従えば、B と V は「直接、あるいは間接に」共通の下位祖形 *sub-arquetipo* に遡る。そして、この下位祖形がふたたび「直接あるいは間接に」A と共通の祖形に遡るとされる。この祖形から B と V に共通の下位祖形との間に中間の段階を置くか、さらに B と V は直接、下位祖形にたどり着くかどうかという点で意見が分かれている。いずれにせよ、歴史的にも、伝承のレベルという点でも、A がもっとも祖形に近いことになるが、この3者間の伝承の分岐は常に二枝的であるので、写本の間での語形のバリエーションの分布がテキストの決定にあまり効力がない反面、16世紀の、しかもイタリアで作成されたとされる B と V という「より新しい」写本が伝えるテキストが必ずしも A のものより新しいとは限らない。

作成された語形ごとの対応表に基づき、いくつかの観察を試みしてみる。まず、最初に綴り字上の特徴について触れる。写本の綴り字には、中世の写本一般がそうであるように、一定の規則性と不規則性が交錯している。たとえば、j と i, y は区別されずばらばらに用いられ、また u と v の区別は

まだ存在せず、j と i についても区別があるかどうか疑わしい。また、現代語の鼻母音に対応する語末の表記には -n, -m, ~ が無作為に用いられている。それでも、A では y の使用がかなり少ないような印象を与えるし、また -m にいたっては、その例は極端に少ない。資料のなかでは 16-1 bem と 16-3 porem のみが A で -m を用いている例である。"bem" は A では 69 例あり、うち bem が 1、b ē が 1、ben が 67 である。同じ語について B では、54 例の "bem" のうち bem が 5、bē が 26、ben が 23、V では 52 例の "bem" につき bem が 6、bē が 15、ben が 31 である。B や V での -n, -m, ~ の分布には積極的意味はないが、A で -m が極端に少ないことには意味がある。そのような書記伝統に支配されるスクリプトリアで作成された可能性があるからである。しかも、二箇所みられる 16-1 bem と 16-3 porem は同じ写字生によるものである。

さらに、口蓋音の表記である lh と nh を取り上げると、ポルトガル語ではこの2つの綴り字は 1265 年と 75 年のあいだに採用されたことが分かっている。従って、それ以前の文献ではこの綴り字に対応する音の表記には l, ll や n ñ nn などが無作為に用いられているが lh と nh が現われることはない。資料のなかの綴りに関しては、以下に示されているように A では lh や nh は決して現われない。

	A	B	V		A	B	V
6-05	fillar	: filhar	; filhar	16-05	mellor	: melhor	; melhor
6-11	fillar	: filhar	; filhar	16-11	mellor	: melhor	; melhor
6-17	fillar	: filhar	; filhar	19-14	mellor	: melhor	; melhor
23-02	fuylle	: fuylhe	; fuylhe	23-03	mellor	: melhor	; melhor
1-20	l'eu	: lh'eu	; lh'eu	23-16	mellor	: /melhor /	; /melhor/
11-09	lexedes	: leixedes	; leixedes	17-11	nulla	:	;
9-10		: lhis	; lhis	17-17	nulla	:	;
2-16	lle	: lhe	; lhe	22-06	mellor	: melhor	;
19-07	lle	: lhi	; lhi	13-02	nulla	: nulha	; nulha
19-13	lle	: lhi	; lhi	17-05	nulla	: nulha	; nulha
13-09	lle	: lhi	; lhi	4-06	nulla	: nulha	; nulla
13-08	ll'eu	: lh'eu	; lh'eu	5-07	ollos	: olh(os)	; olh(os)
13-15	ll'	: lh'	; lh'	8-08	ollos	: olh(os)	; olh(os)
21-05	ll'	: lh'	; lh'	10-05	ollos	: olh(os)	; olh(os)
6-06	ll'ouso	: lh'ouso	; lh'ouso	10-08	ollos	: olh(os)	; olh(os)
22-03	marauillo	: marauilho	; marauilho	10-11	ollos	: olh(os)	; olh(os)
21-25	mellor	:	;	10-17	ollos	: olh(os)	; olh(os)

12-03	ollos	:	olh(os)	;	olh(os)	3-08	ualla	:	ualha	;	
15-09	ollos	:	olh(os)	;	olh(os)	3-03	ualla	:	ualha	;	ualha
19-08	ollos	:	olh(os)	;	olh(os)	8-04	ualla	:	ualha	;	ualha
23-02	ollos	:	olhos	;	olhos	8-10	ualla	:	ualha	;	ualha
24-03	ollos	:	olh(os)	;	olh(os)	16-08	ualla	:	ualha	;	ualha
18-09	ollos	:	oll(os)	;							

nh については該当する語は “senhor” だけであるので、資料のなかでの写本ごとの生起数を次に示す。

A : sennor 39 señor 17 senor 1 B : senhor 52 sēhor 2 V : senhor 50

写本の伝承を考える上で写字生の書き間違いなどに起因する「明らかな誤り」は重要なかぎとなるが、資料のなかにもそれに相当するものがいくつか見い出された。下線で示したものがそれである。

	A	B	V		A	B	V				
2-14	coitado	:	<u>forcado</u>	;	<u>foreado</u>	1-09	fazen	:	fazen	;	<u>fanzen</u>
23 -04	direi	:	<u>dysey</u>	;	dyr	3-03	mal	:	mal	;	<u>sal</u>
14-05	catando	:	<u>cantando</u>	;	catando	1-15	m'end	:	<u>m'and</u>	;	m'end
14-12	catando	:	<u>cantando</u>	;	catando	13-03	pagaua	:	<u>plagaua</u>	;	pagaua
2-03	e da	:	<u>dae</u>	;	e da	2-16	partir	:	<u>parar</u>	;	<u>parar</u>

誤りのパターンは B と V に共通して現われるものと B だけ、ならびに V だけという3種類である。この分布は B と V が互いに相手を写したものでなく、かつ共通の起源に遡るというステマティカを支持するものと考えられる。

次に、いずれも誤りとは見なされないが、単なる綴り字の違いを超えた語形や語句のバリエントの例を挙げる。

	A	B	V		A	B	V				
16-13	ben sei	:	muj ben sey	;	muj be~ sey	21-09	eu por meu mal	:	polo meu mal	;	polo meu mal
13-07	bon prez	:	prez	;	prez	3-20	menti ia	:	menti	;	menti
19-07	[D]eu	:	Nost(r)o sen(o)r	;	Nostro sen(hor)	8-03	mesquinn'e	:	e eu mezquinho	;	e eu mezquinho
2-06	dond	:	ond	;	ond		e u fiquei		fiquey		fiquey
2-11	e nō	:	nē	;	nē	19-07	mui bon pareçer	:	bon prez	;	bō prez
2-05	e non	:	nē	;	nē	7-03	mui grā	:	gram	;	gram
2-17	e non	:	nē	;	nē	25-15	o grand amor	:	/o mui g(ra)ndamor/	;	o mui g(ra)ndamor
15-19	e poren	:	poren	;	poren	21-10	porē	:	p(or)	;	p(or)
2-10	e	:	poys	;	poys	5-14	por mal	:	p(or) meu mal	;	p(or) men mal

4-01	Por	: Par	; Par	6-09	soube	: soube	; soube
2-03	pos'seu	: p(or)sseu	; p(or)sseu	21-17	soube	: soubi	; soubi
24-07	prez	: parecer	; parecer	25-09	soube	: / soubi /	; soubi
3-15	pude	: pudi	; pudi	20-03	souberen	: souberon	; souberō
7-09	pude	: pudi	; pudi	9-21	ueio que	: q(ue) ueio q(ue); q(ue) ueio q(ue)	
18-05	pude	: pudi	; pudi	8-07	u eu	: hu	; hu
22-04	pude	: pudi	; pudi	21-20	u eu	: quād'eu	; quād'eu
3-07	pu'deu y al	: pu'deu al	; pu'deu al				

これらのバリエントのパターンも、「明らかな誤り」の例同様、B と V に共通するものが多く写本の系統に沿ったものといえる。上の対応のなかで、特に語句の対応の場合、語数が異なるのは行の音節数を調節するためと考えられる。語の対応が類義語の間で起こっているものについては、テキストの伝承の過程というよりは、詩作活動そのものにかかわるものかもしれない。資料のなかには“pude”と“soube”という二つの完了形が現われているが、文脈を調べてみると、3-15, 7-09, 18-05, 22-04, 21-17, 25-09 はいずれも 1 人称単数形であり、6-09 は 3 人称単数形である。A ではいずれの形も語尾 *-e* に終わっているが、B と V では 1 人称単数形の場合は *-i*, 3 人称単数形のほうは 1 例だけであるが *-e* で表記されている。見ようによっては A では失われてしまった完了形の 1 人称単数形の *-i* と 3 人称単数形の *-e* の区別を B と V が保持しているようにも解釈出来る。A の 2-03 *pos'seu* は *por seu* から *r* が *s* に同化してしまったため生じた形で、口語では頻繁に聞かれるが文証形は意外と少ない。この形が A の写本に筆写されたこと背景として、ひとりの人間がテキストを読み上げ、(複数の) 写字生が書き取るという方法を考えるならば、逆に *pudi* と *pude* の対応にしても、もともとのテキストには書かれていたものが、音声による筆写のため A では失われてしまったと考えることも出来るのではない。ただし、これだけではやはり結論を出すには不十分ではある。

5. おわりに

実はこの論稿はまだ未完成である。調査すべき A, B, V の 3 つの写本に共通して現われる詩篇としてまだ 29 篇ほどが残っているし、合わせて 54 篇のすべてについて作者や作成年代による分類を加える必要があるからである。しかし、それでも写本の間の変種を細かく対照させていくことによって、いくつか興味深い事実が浮かび上がってくることは示されたと思う。実は、ステマティカに関する従来の論議の問題点は各写本をまとめたひとつの統一体、少なくとも伝承のレベルの上では同一の線に並ぶものとして扱っていたことにあるのではないかと思われる。詩句を調べていくと、あるものは写本の間の変種が非常にきれいだ、あるものはきわめて異同が激しいといったものなど様々である。B の写本に見られる欄外の書き込みなどから、もともとのオリジナルは作者ごと、ある

いはジャンルごとのばらばらの巻紙ではなかったかといわれているが、もしもそのような事情があったのであれば、なにかそれを反映するような証左をつかめないかと考えている。

テキストのエディション

- A = *O Fragmento do Nobiliário do Conde Dom Pedro · Cancioneiro da Ajuda, edição fac-similada do códice existente na Biblioteca da Ajuda*, 1994, Lisboa:Edições Távola Redonda.
- B = *O Cancioneiro da Biblioteca Nacional (Colocci-Brancuti) Cod.10991, reprodução facsimilada*, 1982, Lisboa: Biblioteca Nacional · Imprensa Nacional-Casa da Moeda.
- V = *O Cancioneiro Português da Biblioteca Vaticana (Cód.4803), reprodução facsimilada*, 1973, Lisboa : Centro de Estudos Filológicos · Instituto de Alta Cultura.
- Michaëlis 1904 = Vasconcellos, Carolina Michaëlis. 1904. *Cancioneiro da Ajuda, edição crítica e commentada, volume I*. Halle: Max Niemeyer. (Reimpressão.1990. Lisboa:Imprensa Nacional-Casa da Moeda.)

参 考 文 献

- D'Heur, Jean-Marie. 1973. *Nomenclature des troubadours galiciens-portugais (XIIe-XIVe siècles), table de concordance de leurs chansonniers, et liste des incipit de leurs compositions*. In: Arquivos do Centro Cultural Português VII, pp.17-100. Paris.
- Tavani, Giuseppe. 1988. *Ensaio Portugueses, filologia e linguística*, Lisboa : Imprensa Nacional - Casa da Moeda.
- Tavani, Giuseppe. 1990. *A Poesia Lírica Galego-Portuguesa*, tradução de Isabel Tomé e Emídio Ferreira, revisada pelo autor, Lisboa : Editorial Comunicação.
- Tavani, Giuseppe e Giulia Lanciani (Organização e Coordenação). 1993. *Dicionário da Literatura Medieval Galega e Portuguesa*, Lisboa : Editorial Caminho.